

あらしのよるに

2005(平成17)年11月8日鑑賞〈東宝試写室〉



監督・演出・脚本=杉井ギサブロー／原作・脚本=きむらゆういち／声の出演=中村獅童／成宮寛貴／林家正蔵／小林麻耶／板東英二／竹内力（東宝配給／2005年日本映画／107分）

第3章

映画館の暗闇で人間観察

……喰う立場のオオカミのガブと、喰われる立場のヤギのメイが大の親友となるだけでもコペルニクス的大転換……？ しかしそんな「特異な関係」が長く続くはずはなく、2人だけの秘密の友情は、「種の属性」をかけてさまざまな試練を受けることに……。しかし試練の中でこそ、ホンモノかニセモノかがはっきりしてくるもの。現実にはありえないファンタジーの中で、さてあなたは、友情のあり方について、何をどのように学ぶことができるだろうか……？

たしかに面白い設定だが

この映画の「主人公」はオスのオオカミとヤギの2匹（2人）。そしてこの映画は、生き残りをかけた生存競争を表現するのに最も適切な「喰うか喰われるか」という言葉を使えば、常に「喰う」側にいるオオカミのガブ（中村獅童）と「喰われる」側にいるヤギのメイ（成宮寛貴）との間の（男の）友情をテーマとしたもの。この設定の面白さが、この映画の原作本（絵本）である、きむらゆういちの『あらしのよるに』が累計で220万部も売れた最大の理由だろう。それは私も認めるものの、この映画から期待されるほどの感動を私が覚えなかったのは、私がアニメ嫌いのせい、それともこの設定に少しムリがあるせい……？

そもそも「種の属性」上ムリな設定では……？

たしかにこの映画は、ガブとメイの友情をベースとして2時間弱の長編映画を成立させるに十分な面白い物語をつくりあげている。そして数々のスペクタクル

シーン(?)をまじえて、その友情の真価を問いかけ、感動的なフィナーレに観客を導いてくれる。しかし、私が思うにやはりそれはかなりウソ。と言ってしまふと怒られるとすれば、あくまでファンタジーの世界だと自分を納得させたうえで、そのストーリーを楽しまなければならないもの……。それはなぜかという、そもそもオオカミとヤギとの間の友情などはありえず、食べるものがないという極限状態になれば、所詮「種の属性」上、喰う側は喰う側に立ち、喰われる側は喰われる側におかれるはずだと私は思ってしまうから……。

男と男の友情が生まれるきっかけは……？

男と男の友情が生まれるきっかけには、当然さまざまなパターンがあるが、ガブとメイとの間に芽生えた最初の友情のきっかけは……？ それは真っ暗闇の中で、目も見えず鼻も利かないという状況下であったため、「会話」のみによって成立したもの。かなり突っこんだ会話をしているものの、初対面(?)という遠慮もあって、あと一步のところまで踏み止まっていたため、お互いの立場の相違はわからないまま。そのため、お互い同じ「立場」にあるものと錯覚したうえで、2人は翌日の男同士のデートを約束した。そしてその時の2人の合言葉が、「あらしのよるに」ということだ。翌日、その合言葉をガブが口に出したことによって、「ご対面」となった2人は……？

主導権はどちらに？

「合言葉」を聞いて顔を出したメイが目前にしたのはオオカミのガブ。こりゃお互いビックリしたはずだが、とりわけ喰われる立場のメイは恐怖に身がすくんでしまったはず。ところが……？ 意外とヤギでも根性のすわっている奴はいるもの……。

このメイは子供の時にオオカミに襲われて母親を亡くしているだけに、いざとなれば根性はすわっている性格のよう……？ これに対して、ガブの方は、オオカミのくせに(?)生まれつきやさしい性格の持ち主のよう……？

そんな2人だからこそ、秘密の友情が芽生えたわけだが、2人間の会話を聞いていると、終始メイがリードし、ガブはそれに対応している感じで、主導権は

明らかにメイにある。ヤギの平均年齢とオオカミの平均年齢がそれぞれ何歳ぐらいなのか知らないが、この2人を見ていると、明らかにメイの方が早熟で、ガブはまだまだガキ……？

ヤギには団体行動が不可欠……

ヤギ族の長老（板東英二）が一族を集めて述べる訓示は、「昨今オオカミの危険が増大しているためくれぐれも単独行動をとらず、団体行動をとるように」ということ。ところが、メイの最近の行動は怪しい。つまり、1人で「友達に会いに行く」などと言うわけだ。

そこで、付添人として（？）同行したのが、メイの兄貴分のタブ（林家正蔵）と友達のみい（小林麻耶）。どうしてもこの2人の付き添いを断りきれなかったメイは、3人の団体でガブとのデートに。

兄貴分と称するタブは「オオカミなんて……」と言っていたが、概して大言壮語する奴はイザとなると頼りないもの……。ガブの登場によって、当然のように発生したハプニングも面白いもの……。

群れを離れることの功罪と、2人の決断は？

ガブとメイが親友であることは、モンタギュー家のロミオとキャピュレット家のジュリエットが愛し合うことが許されないのと同じように、いやそれ以上に許されないこと！ したがって、2人の「秘密の友情」が判明してしまうと、オオカミという種族そしてヤギという種族それぞれの立場から、ガブとメイに対してさまざまな圧力が……。そのため2人とも「あちらを立てればこちらが立たず」というニッチもサッチもいかない状況に追い込まれることに……。

そこで2人が迫られた「究極の選択」とは、友情を裏切るかそれとも群れを離れるかということ。そこで2人がとった決断は……？

2人が目指したものは？

群れから離れた2人だが、オオカミとヤギのコンビという特殊な存在は、本来「世間」で受け入れられるはずのないもの……。そのため、2人が目指したもの

は……？

ここでもリーダーシップをとるのは、ヤギのメイ。身体は小さいくせに考えることは壮大で、何と目の前に広がる誰も越えたことがない高い雪山を越えて、向こうの世界に行こうと言い始めたのだ。そのココロは、あの山の向こうにもきっと緑豊かな森があるということ。いわば「新世界」を求めて海を渡るようなものだが、決定的に違うのはメイの場合、何の事前情報もなく、ただ希望的観測だけに頼っていること。そして単純なガブは、メイのこの提案にすぐに乗ったが、さて彼らの前途は……？

オオカミはしつこい動物

狙った獲物は絶対逃さないというしつこさを持っているのがオオカミ。そしてオオカミ族のボスのギロ（竹内力）は掟に厳しいうえ、ヤギ狩りに執念を燃やしていたから、群れから外れたガブを「処罰」し、かつ一緒に逃げているおいしそうなメイを喰ってしまうため、追跡を開始。雪山を越えようとする中、体力の弱いメイは途中でダウンするわ、ギロたちの追跡隊が近づいてくるわでガブは大変だが、そこは頭は単純でも本能はオオカミ。さて、ガブはどのように追跡隊に立ち向かっていったのだろうか……？

感動的フィナーレは？

この映画の原作となったベストセラー絵本は1994年に初版が出版されたが、以降続編が続き、結局第6巻の完結編まで続いたとのこと。そのうえ今年11月には、さらに第7巻が出版されるらしい。

絵本ではガブとメイの友情物語がどのような形で完結しているのか私は知らないが、映画では、当然感動的なフィナーレとすることが不可欠……？　そこでこの映画が用意したフィナーレとは……？

2005(平成17)年11月9日記